



©Shin Yamagishi



©井村重人

第213回定期演奏会 渾身のブルックナー

2025年9月20日(土) 13:45開場 14:30開演

指揮/下野竜也 メゾソプラノ/池田香織*

ワーグナー: 楽劇「トリスタンとイゾルデ」より「前奏曲と愛の死」*

ブルックナー: 交響曲第4番変ホ長調WAB104「ロマンティック」(ハース版)

我らが角田鋼亮音楽監督と共に、感情を深く揺さぶる3作品をお楽しみいただいている本日……に続きまして、次回の定期演奏会(夏休みを挟んで)9月20日。近年いよいよ豊かな充実を(力強く!)深める指揮者、下野竜也さんをお迎える、こちらもスペシャルな回であります。

スケールの大きな、そして細部まで錬磨も美しい音楽を響かせるマエストロ下野は、国内外で大人気。これまでも読売日本交響楽団(正指揮者ほか)や京都市交響楽団(常任首席客演指揮者ほか)でオーケストラに豊かな刺激を与え続けて来員・聴衆から強い信頼を得たほか、昨年まで広島交響楽団の音楽総監督を務められ(現・桂冠指揮者)、歴史あるオーケストラに新たな可能性を大きく拓いてみせました。

現在もNHK交響楽団の正指揮者、広島ウインドオーケストラの音楽監督、札幌交響楽団の首席客演指揮者を兼任しながら、国内外を飛び回る日々。その明るいお人柄は、NHK-FMで放送されている番組「吹奏楽のひびき」パーソナリティとしても広く愛されています。

そんなマエストロ下野をお迎える今回の定期では、ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》から「前奏曲と愛の死」、そしてブルックナーの交響曲第4番《ロマンティック》をお聞かせいただきます。——今シーズンのセントラル愛知響定期演奏会は、年間通してのタイトルに《ロマンティック・セントラル》を掲げていますが、今回の選曲もまさに真ん中、です!

【耽美の極み、愛の成就——《トリスタンとイゾルデ》の世界へ】

オペラ(歌劇)は「言葉が判らない歌をずっと歌われるのは……」と敬遠されるかたもいらっしゃるでしょう。そんなかたに、いちばんお勧めにくいオペラ——と書いて脅かすわけではありませんが、言い直しますと——その耽美の極みに深く沈められてしまう至極の魅力を一度知ってしまえば、その長さにも納得という傑作が、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》です。

このオペラは、中世ヨーロッパに広く伝えられたトリスタン伝説を基に書かれたもの。——コーンウォール王の甥である騎士トリスタンが、王の花嫁に迎えられるイゾルデ(仇敵であるアイルランドの王女)と、道ならぬ恋におちてしまいます。燃え上がるが許されぬその愛は、ふたりの死において成就する、という物語です。

身も心も灼き尽くすような愛の果ては、恍惚の死……これを途方もなく美しいオペラに仕上げたのは、ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナー(1813~83)です。

【途方もなく長いオペラを、ぎゅっと濃縮!】

壮大な深呼吸に吞まれるような……とでも申しましょうか。なにしろ耽美的な、とても息の長い愛のメロディが、憧れに満ちたハーモニーを纏いながら、しっとり絡み合い、昂揚を歌いあげ、はたまた愛の苦しみを深々と彫り込んでゆく音楽。どこか現世を離れたような感覚すら味わえる、ワーグナー作品の至高とも言える傑作なのです。

登場人物が少なく、お話自体もそう複雑ではないオペラですが、休憩なしの録音でも3時間半(!)。この大変に息の長い時間感覚も素晴らしい秘密なのですが、本作の醍醐味をぎゅっと濃縮したようなひととき——長くて20分ほど——でお楽しみいただけるのが、次回定期でお聴きいただく「前奏曲と愛の死」というダイジェストです。

簡単に言えば、オペラの開幕前に演奏される「前奏曲」と、オペラの最後でヒロインが歌うフィナーレ(内容から「愛の死」と呼ばれます)を繋げて演奏するというもの。「前奏曲」にはオペラに登場するさまざまなモチーフ(「愛の憧れの動機」や「愛の秘薬の動機」〈宿命の動機〉「愛の高潮の動機」など)が織り上げられて、まさに描かれる内容を濃縮しているようすし、そこにフィナーレ(トリスタンが愛の昂揚の果てに死を迎えるシーン)の音楽を繋がるわけですから、この「前奏曲と愛の死」だけでオペラの見事な要約になってしまうのです。

【イゾルデ役を深く染みこませて——池田香織さんならではの〈絶唱〉を!】

ところが、このダイジェストの後半「愛の死」の音楽では、イゾルデの独唱パートをカットして演奏・録音されることがしばしばです。歌唱を

抜いても十分に迫力のある音楽、というのも凄い話ですが、この数分間のために名歌手をお呼びするのも……ということもあって、歌唱カット版での演奏が多いわけです。

しかし、もちろん本来は歌唱があつてこそ。ということで、次回定期では〈愛の死〉の歌唱に、日本の誇るメゾ・ソプラノであり、今や日本でのワーグナー作品上演に欠かせない存在でもある名歌手、池田香織さんをお迎えいたします。

2016年の東京二期会オペラ劇場《トリスタンとイゾルデ》でのイゾルデ役が大絶賛を浴びた池田さんは、上演前に1年かけてこの役を自分の中に入れた……と以前のインタビューで語っておられました。作品に強い愛情を注いで挑まれてきたただからこそ、一瞬にすべてを込めた表現。池田さんとは何度も共演を重ねている下野さんとの呼吸も万全のはず。これはぜひ、生演奏で体感していただきたいと願います。

【内なる感情が、壮大な自然へ——傑作《ロマンティック》の音世界】

さて。次回定期の後半でたっぷりお楽しみいただきますのは、そのワーグナーを深く崇拝していた作曲家、アントン・ブルックナー（1824～96）の人気作、交響曲第4番変ホ長調《ロマンティック》です。

ワーグナーのほうは、伝統的なオペラを遥かに越えたスケールを持つ〈楽劇〉——音楽や演劇などさまざまな芸術ジャンルを統合した、総合芸術としての舞台作品に独自の世界を拓きました。

それとは対照的に、ブルックナーは、教会音楽と交響曲に創造力のはほとんどを注ぎました。オペラなど標題的な音楽はまったく書いていません。崇拝していた割には距離がずいぶんあるようですが、優れた芸術家の個性、というのはそういうものなのでしょう。敬愛はどこかに隠れているのです。

この交響曲第4番、実に印象的な始まりかたをする音楽です。

ごく静かにさわさわと、森がさざめくような弦楽器の響き……（かつてこれを〈原始霧〉と形容した人がいて、うまい説明ですね）、そのなかから、ゆっくりとこだまするようなホルンの呼び声が聴こえてきます。

そこから音楽は少しずつ音量と力を増してゆき、やがて壮大なテーマが強く轟きわたります。しかし、聴き手を呑んでしまうようなその頂点で、オーケストラからすっと力が引き（まるで、パイプオルガンが余韻を響かせながら音栓を切り替えるようです）、息長く美しい歌謡的なテーマが現れます。かと思えば、確信をこめて鳴りわたる荘嚴なコラール。

——こうした対照が、まるで自然が大きな呼吸をするように連なってゆきます。雄大な自然のなかを、夢みるように歩いているような気持ちになるかも知れません。内なる感情が拡がり、夢想の自然と一体化してしまうような、現実の先に広がる夢に強い真実を見出すような……

【時を忘れて、ロマンティックの彼方へ!】

この実に美しい交響曲、時間感覚を忘れてしまうようなスケール感まで堪能できるのも醍醐味です（ので、演奏時間は少々長めですが、初めてのかたもご心配なく）。そして、このスケール感や時間感覚こそ、邪魔の入らないコンサートホールで、ごくごく静かな響きまで美しく聴きとれる環境で、体感していただきたいのです。

次回定期で、この《ロマンティック》の魅力をオーケストラと共に響かせてくださるマエストロ下野は、そのデビュー期にブルックナー交響曲の大家としても知られた巨匠、故・朝比奈隆のもとで大阪フィル指揮研究員として研鑽を重ねておられます。

ブルックナーの交響曲は老大家が指揮するもの……という先入観も強かった時代もありましたが、下野さんは若い頃から積極的にブルックナー作品を指揮。2006年には大阪フィルと交響曲第0番（妙な番号ですが、第1番以前の習作、という意味です）をライブ録音していますし、堂々たる実績を重ねた近年では、広島響との第1・4～8番のライブ録音がCD化されて愛好家を感嘆させております。

ブルックナー演奏の最前線を担うひとりである下野さんが、セントラル愛知響からどのような音世界を広げてみせるのか……ぜひ強く期待していただきつつ、次回もこのホールでお会いいたしましょう!

やま の たけひろ
山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、朝日カルチャーセンター新宿教室での音楽講座、歌詞対訳など多数。

Profile

